

鏡野町の奇岩・巨岩①

自然豊かな鏡野町の景観を構成する一つとして、大小様々な自然石があります。

これらは長い年月の間に浸食や崩落などによって変わった形を呈しているものや、際立つ大きさのものが、古くから人々の注目を集め、色々な伝説と共に信仰の対象や地域のシンボルとしてそれぞれに名前が付けられ、今日まで残されてきました。今回はこうした町内に残されている奇岩・巨岩について紹介します。



刀掛け岩



立神の烏帽子岩



亀石

① 刀掛け岩（上齋原）

上齋原の三ヶ上山頂から、尾根を少し下った所にあります。花崗岩が浸食され、刀掛けのような形をしています。

三ヶ上は、かつて修験道の行場があり、山頂には中世の不動明王や役行者の石造物が今でも残り、山岳信仰の霊地であったことがうかがえます。付近には、「法印の跡」または「天狗の遊び場」と呼ばれる風化した花崗岩の小石が敷き詰められたような広場もあり、刀掛け岩が単に岩

の形状のみから名付けられたのではなく、刀を帯びた修験者（山伏）の存在もイメージされながら名付けられたことが想像できます。

② 立神の烏帽子岩（上齋原）

町指定文化財（天然記念物）。国道一七九号を北上し、上齋原トンネル入り口付近から吉井川を見ると、川の中に水面から高さ約四mの台形状の巨岩が立っています。元禄四年（一六九二）刊の『作陽誌』の中に「立神瀬の南二丁許り水心に烏帽子巖有り。方三間形似るを以て之に名づく」と書かれていることから、昔の人がかぶっていた「烏帽子」に形が似ていることからこの名が付いたように、江戸時代にはすでにこの名で呼ばれ、倉吉街道を往来する人々の目に留まっていたことがわかります。

「エボシ」がなまって「ヨボシ岩」、また「カンムリ岩」とも呼ばれています。この烏帽子岩にまつわる伝説として、昔、鬼が烏帽子をまねて作って見たものの、小さすぎて頭に入らないので、怒って川に投げ込んだ、という面白い話も伝わっています。

③ 亀石（長藤）

奥津神社の拝殿の傍に、柵に囲まれ半ば埋もれて頂部のみがわずかに

に見える岩があります。これも『作陽誌』に掲載されている「亀石」で、亀の甲羅に似た形であることからこの名が付いたといえます。別名「腰懸石」ともいい、同書には次のような伝説も書かれています。

昔、道に迷った旅人がこの地にたどり着き、亀石の上に座った老人に出会いました。旅人が道を尋ねると老人は正しい道を旅人に案内しました。旅人がお礼を言って去ろうとすると、老人は小さな筒を旅人に与え、こう言いました。

「この先で、青い着物を着た子供に会えば逃げなさい。もし逃げられないようであればこの筒の中の水をかけなさい。」

旅人は半信半疑で先を行くと、老人の言葉通り子供がいました。旅人は急いで逃げ、追いかけてくる子供に捕まりそうになった時、筒の中の水をかけると子供は慌てて走り去ろうとしましたが、ほどなく倒れ、青い蛇の姿に変ったということです。

あまり目立つ岩ではありませんが、数百年前から伝説と共に伝えられた貴重な歴史資料です。

参考資料：『作陽誌』『上齋原村史』『鏡野町の文化財』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733